病院に芸術を

作品解説　中西　繁

櫻園通信　77　令和４年８月

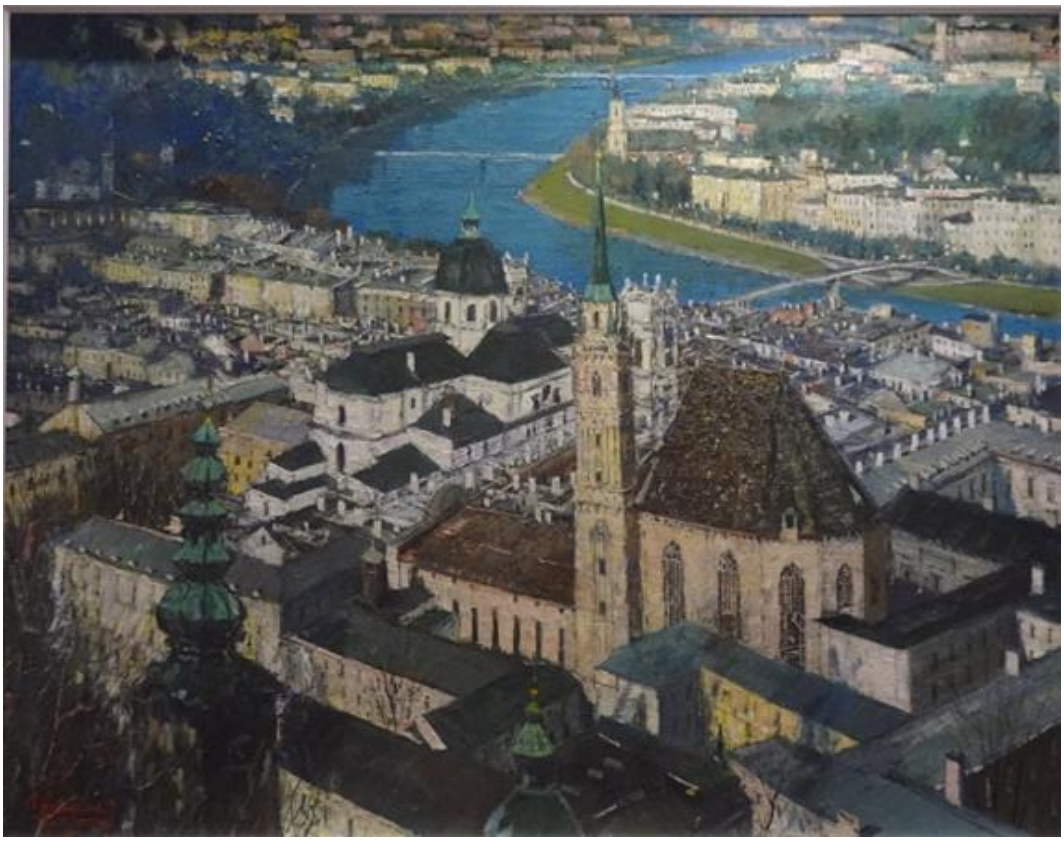
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

ホスピタル　アート　ワーク　芸術作品で病院を癒しの空間に

2013 年に東京都健康長寿医療センターの新施設建築時、設計段階でアートワークを重視するアート選定委員会がもたれ、討議をベースとしたデザインがなされた。以来８年たち、養育院・渋沢コーナーも整備された。

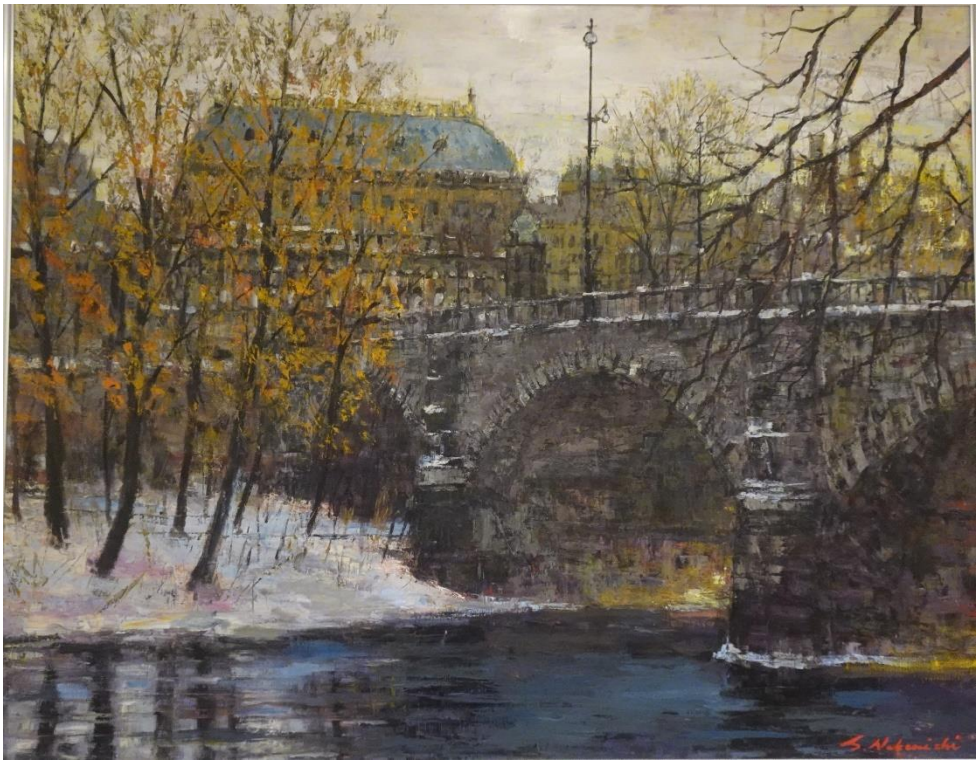
2021 年に、油絵画家中西 繁画伯より、ヨーロッパの風景画の 150 号、100 号の大作のご寄付を頂き 1、2 階ロビーの壁面にすえ、彩りを添えた。画伯に自身の作品解説を頂いたので紹介する。

東京都健康長寿医療センター顧問医　稲松孝思



ザルツブルグ遠望　150 号

オーストリアの古都ザルツブルグ。ドイツ語でザルツは塩、ブルクは砦。岩塩の産地で興った町です。1756 年ヴォルフガング・アマデウス・モーツアルトが生まれ 25 歳まで過ごした街。1906 年には指揮者のヘルベルト・フォン・カラヤンもこの街で生まれました。ザルツブルグ音楽祭が行われる音楽の街と言っていい。ミュージカル、サウンド・オブ・ミュージックの最後の音楽祭の舞台も現存します。絵は、市街地から 50mほどの高台に建つホーエン・ザルツブルグ城からの眺めです。旅行先での取材であるため、私の撮影した写真をもとに制作しました。城の下に多くある教会の塔をポイントにほぼ実景です。ザルツァッハ川に架かるシュターツ橋を渡ったところの左手の建物でカラヤンが生まれた。その道を進むと大きな広場になっていて、右手の一角にモーツアルトの生家である記念館があります。12月の天気のいい日でした。澄み切った空気に、注ぐ太陽の光線が作る影が強く、美しい。森の緑は色濃く、ザルツァッハ川の川面がどこまでも清く感じられました。



朝のレギー橋　100号

チェコ共和国の首都プラハは中世、カレルⅣ世の頃、神聖ローマ帝国の首都として栄え、ローマ、コンスタンティノープルと並ぶ欧州の３大都市のひとつでした。その頃から建設された建築が現在もそのまま残されています。私は世界で一番美しい街と思っています。町中を流れるヴルタヴァ川（ドイツ語でモルダウ）からのプラハ城の眺めは素晴らしい。華麗なカレル橋のひとつ上流側に架かるレギー橋はともに古い橋の一つです。アーチ構造の石造りの美しい橋で、正面に見える建物が国民劇場。チェコがハプスブルグ家から独立して共和国になった 1868 年に建設が開始されたのですが竣工の直前に火災が起きて、最上階の屋根が全て焼き崩れたと言います。時の為政者が全国に募金を呼び掛けて再建、1900 年頃完成しました。私は三度ほどプラハに行きましたが、この国民劇場でオペラの当日券を買って観たことがあります。日本よりとてもお安く気軽にオペラが楽しめたボヘミアン・グラスでも有名です。ユダヤ人街の手前にボヘミアン・グラスのお店がいっぱいあります。シンプルなカットの分厚いウヰスキー・グラスが気に入って、1,500 円というので店員に頼みましたら、5 個セットでした。カレル橋を渡って小地区と呼ばれる旧市街地に行きますとまさに中世の街並みそのものです。モーツアルトが何度か演奏旅行で訪れています。

中西繁　1946 年東京生まれ。東京理科大学工学部建築学科卒。
建築家として数々の設計を手掛けた。 一方で、若いときからゴッホの油絵にぞっこんであったが、1990 年に油絵画家としても画壇にデビューした。「哀愁のパリ」、「古都の旅」、「ニューヨーク」、「巴里の空の下で」、「北欧・冬の旅」、「逸楽と憂愁のプラハ」、「光の廻廊」、「懐かしのリスボア」、「イベリア半島の旅」、「エーゲ海の旅」、「地中海の旅」、「哀愁の巴里」など、ヨーロッパ各地を旅しながら毎年個展で発表した。2000 年には、画業一本になる。2004 年から 2 年間パリ留学し、フランス国立美術学校（エコール・デ・ボザール）で学んだ。かつてF.F. ゴッホが住んだパリ・モンマルトルの部屋を住居兼アトリエにし、パリを基点に制作を続けた。1995 年の阪神大震災をきっかけに「廃墟」を描き始め、人類の正と負の遺産をテーマに「廃墟と再生」展を全国 12 都市巡回し、平和と社会正義を訴えている。2014 年に静岡県伊豆の国市に、自然を生かし自然に生き助け合って創作活動を楽しむのを目的に「伊豆の国アートヴィレッジ」を開設した。

塩原分院

養育院の疎開

宮本孝一　老年学情報センター

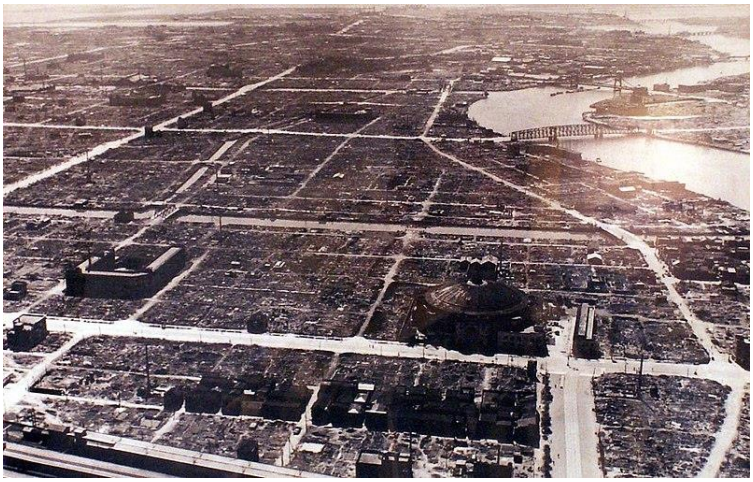
櫻園通信　78　令和5年2月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

一九四四(昭和一九)年に養育院から老人の疎開が開始されました。

翌一九四五(昭和二〇)年に安房臨海学園が海軍に明け渡され、学園の児童も塩原に送られました。同年三月の東京大空襲後には本院の乳幼児が塩原に送られました。四月の空襲では石神井学園の建物が被災したため、児童の大部分を一旦本院に移し塩原に疎開することにしました。

ところが四月一三日の大空襲で養育院本院は大部分が焼失。児童は再び石神井学園に戻り、二度に分けて塩原に向かいました。

本院の機能も塩原に移すこととなり、塩原分院に庶務・保育・監護の三部が設けられました。



空襲により焦土と化した東京

両国駅付近上空から南に向かい撮影

小笠原などから強制引揚となった島民も塩原分院への収容となり、養育院の疎開者は五月には約七〇〇人に達しました。

人口三〇〇〇人の温泉町塩原は、養育院約七〇〇人含め東京からの疎開者一万人がひしめく状態となりました。

疎開先の塩原の温泉街はもともと耕作地が少なく、養育院の食糧は外部からの配給頼みでしたが、極度に不足し

「朝は釜を洗った湯に米粒が浮いたようなおかゆ、昼はひとかけらのトウモロコシ、晩は小石大のジャガイモ何個か」

という日々でした。疎開児童らは栄養失調で苦しみ、体力が著しく衰えました。

塩原分院で飢餓や病気で亡くなった収容者の記録(過去帳)が現地の寺に残されており、それによると疎開開始から一九四五(昭和二〇)年一二月までの一年半に四一八人が亡くなっています。そのうち五〇歳以下は一四二人、一〇歳以下の死者は四一人にのぼりました。

養育院職員と強制疎開で収容されていた小笠原諸島島民は山林を開墾して畑を作りましたが、トウモロコシとジャガイモがわずかにとれただけでした。

一九四五(昭和二〇)年七月の宇都宮空襲では、県庁にあった都の疎開事務所が稼働不能になり、塩原分院への食糧供給が止まってしまいました。そのため、八月に塩原分院の死者数は最大となりました。

塩原分院は戦後に栃木分院と改称し、一九五二(昭和二七)年に閉院しました。

塩原分院(栃木分院)の開院から閉院までに五八一人の収容者が亡くなりましたが、そのうち三〇〇人超は終戦までの一年に集中しました。

塩原分院

(養育院八十年史より)

龍泉寮

宮田寮　上富士寮

常盤寮　塩釜寮

養育院の周年史 その1

宮本孝一　老年学情報センター

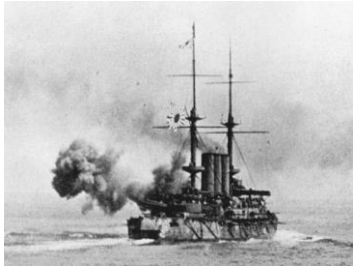
櫻園通信　79　令和5年2月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

企業や学校などが区切りの良い年にその組織の歴史をまとめて記念刊行する本を**周年史**といいます。〇〇周年記念誌、〇〇年史といった名前がつけられます。

養育院もこれまで5つの周年史を刊行しています。2023年2月には東京都健康長寿医療センターで約400ページの病院、研究所開設50年・養育院創立150年記念誌（DVD版）を発行します。

記念出版（周年史）なし

日清戦争


日露戦争

重工業の発展　貧困層の拡大

10周年　1882（明治15）年

本院は神田。記念式典や記念刊行物なし。

養育院廃止案（府費支弁打ち切り）が東京府会で可決。

20周年　1892（明治25）年

本院は本所長岡町。記念式典・記念刊行物なし。

「養育院年報」発行開始。 紡績業や製糸業などの軽工業で産業革命（機械化）。

30周年　1902（明治35）年

本院は大塚。記念式典・記念誌刊行なし。

院長職復活 （1890-1901年は委員長）。法改正により行旅病人の収容者が数倍に急増。日清戦争後、工業化と経済発展が進む。

40周年　1912（大正元）年

本院は大塚。記念式典・記念誌刊行なし。板橋分院用地を取得。1905（明治38）～1914（大正3）年は長期の大不況。

50周年　1922(大正11)年

本院は大塚　・記念式典開催。『回顧五十年』刊行。・板橋に本院建設開始。翌年、関東大震災発生。

養育院創立50周年記念刊行「回顧五十年」

1922(大正11)年、養育院創立50周年記念式典開催。式典の参列者には、渋沢が語った養育院の思い出を田中太郎幹事が筆記し、巻末に各種統計を載せた『回顧五十年』(渋沢栄一述　田中太郎筆記　東京市養育院発行1922)が記念刊行物として贈られた。『回顧五十年』の原稿は、東京市養育院月報の261号と262号にも掲載されている。当時本院のあった大塚は都市化が進んだため、移転が計画されていた。記念式典の年には、板橋で本院の建設工事が始まった。『回顧五十年』は、養育院経営のいくつかのトピックスについて簡潔に語ったもので、50年間の経営で渋沢栄一院長にとって特に印象深かった事は何か、その時に渋沢がどういう思いだったか、を知ることができる。

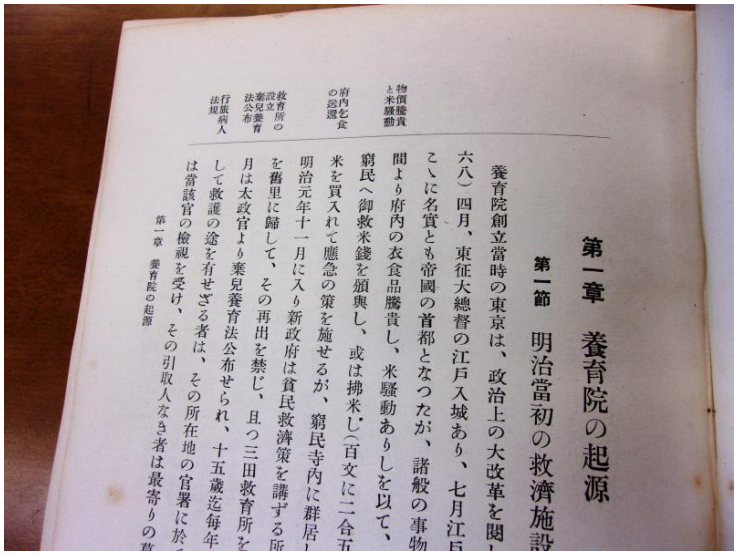
60周年　1932(昭和7)年

本院は板橋。 記念式典開催 『養育院六十年史』刊行。前年に渋沢栄一逝去。満州事変。田中院長就任2か月で急逝。川口院長就任。

5つの周年史①　養育院六十年史

1933(昭和8)年発行　東京市養育院編。 最初に刊行された養育院の周年史。 院史編纂委員長は川口寛三院長。 本文682ページ、附録90ページの大著だがわずか8ヶ月で脱稿。当時保存されていた文書からの引用が多い。

創立以来の養育院に関する一次資料の多くが戦災で失われたため、創立から昭和7年までの養育院の動向を知る基本的な情報源である。



第一章　養育院の起源

第一節　明治當初の救濟施設

養育院創立當時の東京は、政治上の大改革を閲し、
六八）四月、東征大總督の江戸入城あり、七月江戸
こゝに名實とも帝國の首都となつたが、諸般の事物
間より府内の衣食品騰貴し、米騒動ありしを以て、
窮民へ御救米錢を頒與し、或は拂米し（百文に二合五
米を買入れて應急の策を施せるが、窮民寺内に群居し
明治元年十一月に入り新政府は貧民救濟策を講ずる所
を舊里に歸して、その再出を禁じ、且つ三田救育所を
月は太政官より棄兒養育法公布せられ、十五歳迄毎年
して救護の途を有せざる者は、その所在地の官署に於て
は當該官の檢視を受け、その引取人なき者は最寄りの

物價騰貴と米騒動
府内乞食の巡邊
救育所の設立
棄兒養育法公布
行旅病人法規

第一章　養育院の起源

養育院の周年史 その2

宮本孝一　老年学情報センター

櫻園通信　80　令和5年2月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

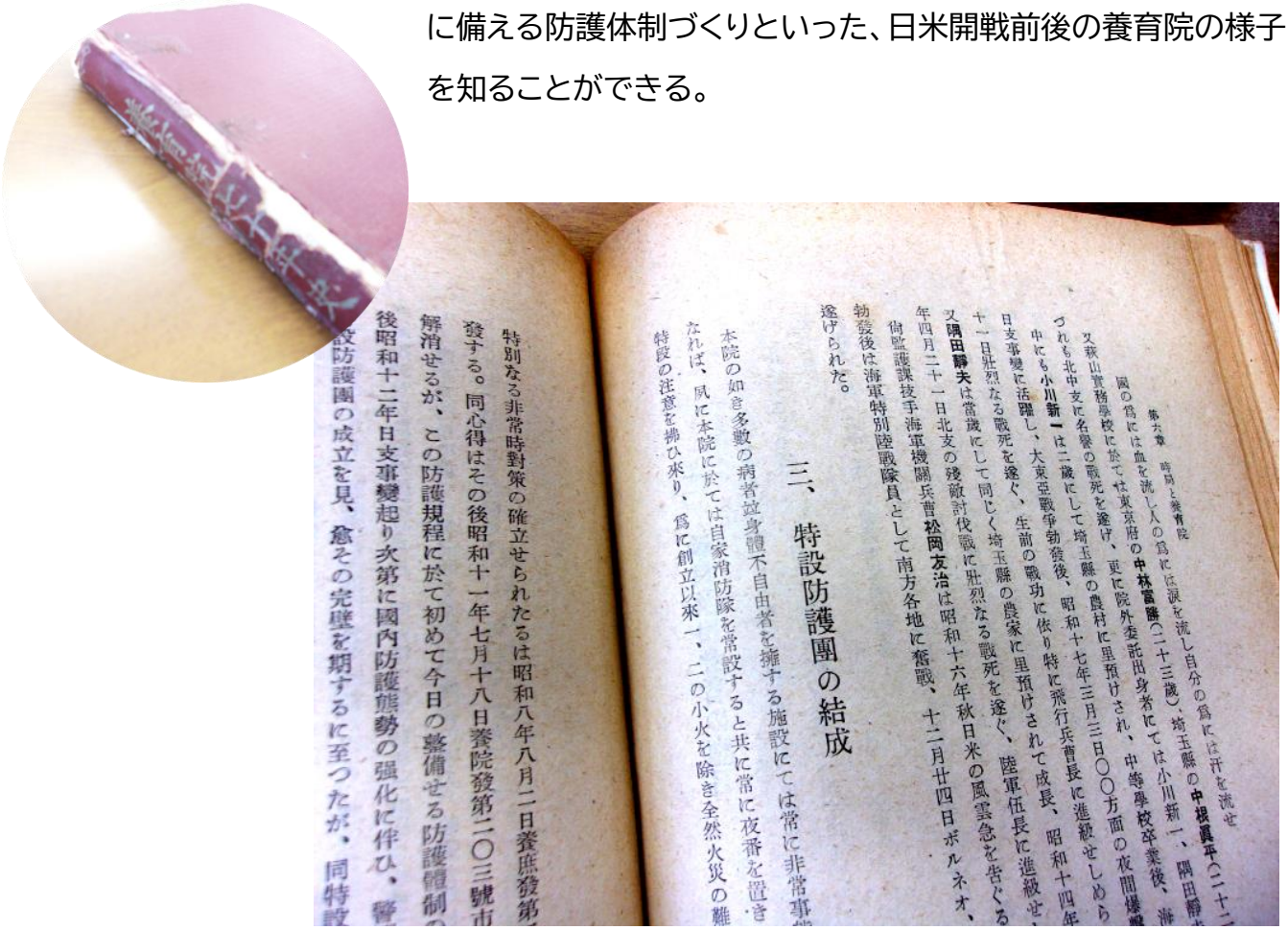
70周年　1942（昭和17）年

記念式典開催、翌年『養育院七十年史』刊行。 前年に日米開戦。

5つの周年史②　養育院七十年史

1943（昭和18）年発行　東京市養育院編。 太平洋戦争開戦の2年後の昭和18年に刊行。その年、連合軍の反抗が本格化し、国内では国民の招集や勤労動員が拡大された。東京では府・市が廃止され都政が施行された。

『七十年史』は、戦時中の用紙制限や経費節減のため他の年史にくらべ小ぶりの製本で、紙質もあまりよくない。昭和7年度から昭和16年度までの10年間について、社会事業史の観点ではなく事務参考資料として簡略にまとめるという編集方針だった。本書では、労働力不足と収容者の減少・養育院事業の拡大・空襲に備える防護体制づくりといった、日米開戦前後の養育院の様子を知ることができる。



第六章　時局と養育院

國の爲には血を流し人の爲には涙を流し自分の爲には汗を流せ

又萩山實務學校に名譽の戰死を遂げ、更に院外委託出身者にては小川新一、隅田靜夫、中等學校卒業後、海
中根眞平（二十二
中等學校に里預けされ、中野方面の夜間爆
埼玉縣の農村に里預けされ、昭和十四年
昭和十七年三月三日〇〇方面の夜間爆
埼玉縣の農家に里預けされて成長、昭和十四年
昭和十六年秋日米の風雲急を告ぐる
陸軍伍長に進級せ
十二月廿四日ボルネオ、
昭和十六年秋日米の風雲急を告ぐる
陸軍伍長に進級せしめら
昭和十七年三月三日〇〇方面の夜間爆
昭和十四年
昭和十四年
昭和十六年秋日米の風雲急を告ぐる
陸軍伍長に進級せ
十二月廿四日ボルネオ、
昭和十六年秋日米の風雲急を告ぐる
陸軍伍長に進級せしめら
昭和十七年三月三日〇〇方面の夜間爆

80周年　1952(昭和27)年

記念式典開催　翌年『養育院八十年史』刊行。栃木分院閉鎖　練馬分院創立五周年記念式典。

1950(昭和25)年、国内は戦後の混乱期から復興期へ移行。

5つの周年史③　養育院八十年史

1953(昭和28)年発行　東京都養育院編。

戦後の大転換期に重点を置いてまとめられた。序文で「戦災及び終戦時の混乱のため資料の散逸したものもあり、又諸種の制約もあって、割愛を余儀なくされた部分も決して少しとしないので十全のものとはいい難い」と書かれており、戦争で多くの記録文書が失われたことがわかる。 しかし「達、告示及び上申書によって当時の状況を語らせる」という編集方針で関係資料を網羅的に取り上げており、引用や統計表が多く、終戦直後からの養育院再建の動向を知る上で重要な文献となっている。

90周年　1962(昭和37)年

記念式典・記念刊行物なし。東京オリンピック開催にむけ都予算は公共投資に重点。養育院予算は縮減。

1955(昭和30)年から長期の好況が始まる(高度経済成長期)。

養育院の周年史 その3

宮本孝一　老年学情報センター

櫻園通信　81　令和5年2月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

100周年　1972（昭和47）年

記念式典開催。1974年『養育院百年史』刊行。新付属病院と老人総合研究所を開設。高度経済成長期が1973（昭和48）年のオイルショックまで続く。

5つの周年史④　養育院百年史

1974（昭和49）年発行　東京都養育院編。一番ケ瀬康子教授（日本女子大学）が編集責任者となり、日本女子大学、東北福祉大学、仏教大学、淑徳短期大学、明治学院大学の研究者と大学院生が執筆した。当初は本文3,000枚+資料の全3巻として作業が進められていたが、インフレによる印刷費高騰などの理由で最終的に本文1,200枚全1巻に縮小された。掲載資料は大幅にカットせざるを得なかったという。

最終章（第9編　画期的な飛躍）では、高齢者医療・福祉・知的障碍者福祉に特化した養育院事業が高度経済成長期に拡大する様子が語られる。この最終章だけは日付が書かれない記述が散見され、養育院事業全体でどんなことが同時並行で起きていたかが見えないという難点がある

巻末の折込ページ「東京都養育院の百年の歩み」は、養育院と諸施設の設置や改組の全体像が見られる便利な図になっている。

第一回今和次郎賞受賞。

第八編　戦後の時代

千葉分院の子供たち

110周年　1982（昭和57）年

記念式典・記念刊行物なし。老人総合研究所創立10周年記念式典。70年代から80年代初頭は、オイルショックによる不況で都の財政悪化。

120周年　1992(平成4)年

記念式典開催。1995年『養育院百二十年史』刊行。

伊豆山老人ホーム40周年記念式典。

空前の好景気(バブル経済)の中、諸施設の拡充計画が策定される。

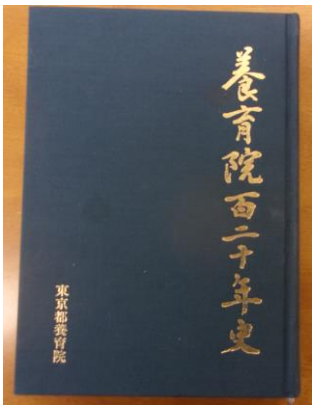
しかし1991年バブル崩壊。

5つの周年史⑤　養育院百二十年史

1995(平成7)年発行　東京都養育院編。

養育院職員を中心とした編集委員会により約2年の編纂で刊行された。『養育院百年史』以後の20年間を中心に記述されている。 その20年の間には、オイルショックがもたらした都の財政難による事業の縮小があり、逆に1981年(昭和56)年からの財政改善期では施設の整備・拡充が進められた。財政改善期では、高齢化社会の到来に備えて医療・福祉施設の充実が図られ、老人性痴呆(認知症)の総合的な研究が始められている。

1991(平成3)年のバブル崩壊で長期不況が始まったが、養育院事業への影響は本書ではほとんどみられない。80年代に引き続いて施設の整備・拡張計画の記述が多い。



130周年　2002(平成14)年

記念式典・記念刊行物なし。1997(平成9)年**養育院廃止**。 高齢者施策推進室設置。東京都老人医療センター創立30周年記念式典。30周年記念誌刊行。

経済低迷が長期化する中、都の福祉・医療の制度改革が次々策定される。

140周年　2012年(平成24)

記念式典・記念刊行物なし。2009(平成21)年　東京都老人医療センターと東京都老人総合研究所を統合して地方独立行政法人東京都健康長寿医療センターが発足。都立老人ホームの民営化や廃止が進む。

150周年　2022(令和4年)

2023(令和5)年2月　記念行事(講演会)、祝賀会開催。『東京都健康長寿医療センター　病院,研究所開設50年・養育院創立150年記念誌』DVD版刊行(発行　東京都健康長寿医療センター)。

在院者から利用者へ
呼び方の変遷

宮本孝一　老年学情報センター

櫻園通信　82　令和5年2月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

養育院創立当初は、養育院に入居している人の対外的な呼称は**入院者・在院者・収容児**でした。

一九〇〇(明治三三)年頃からは成人を**収容者**と呼ぶようになりました。

児童については一九三二(昭和七)年救護法施行後に**被救護者**と改められました。

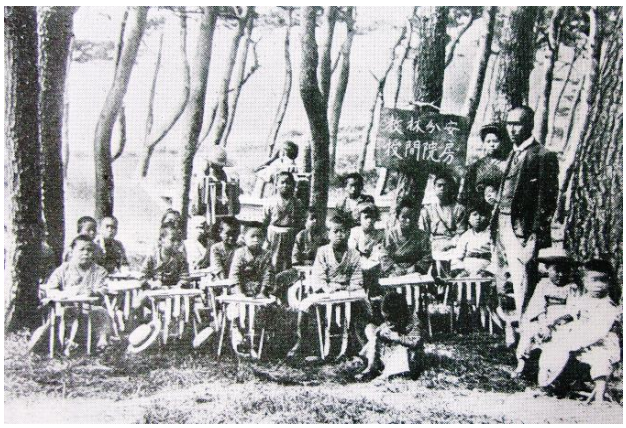
一九三八(昭和一三)年の処務規程改正では**在院者・在院児童・院児**と改称されました。

一九四七(昭和二二)年の処務規程改正以降は**被保護者・保護を受ける者・在院者・在院児童**という言葉が使われましたが、侮蔑的な印象を与えるという批判があって、一九六一(昭和三六)年制定の有料老人ホーム条例で**利用者**という呼称を用いることになりました。

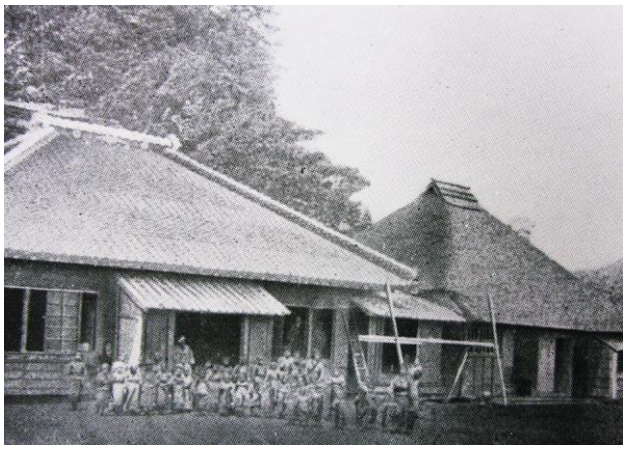
この時は**利用者**という呼び方は有料老人ホームに限られていましたが、一九七二(昭和四七)年に特別養護老人ホームでも利用者が用いられるようになると、養育院事業全体に利用者という呼び方が定着しました。

院内生活者には一九六七(昭和四二)年から在院者手帳が交付されていましたが、一九七二(昭和四七)年からは利用者手帳と改名されました。

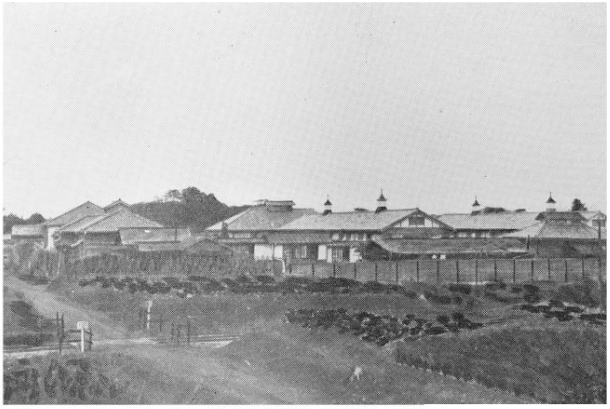
ただ、**利用者**という呼称は養育院の中で使用しているもので、養育院以外で作成された都の公文書には**在籍者・入所者**の呼称が使われ続けました。



安房分院の林間教授　明治43年(養育院六十年史より)



海浜保養所　勝山町　明治33年(養育院六十年史より)

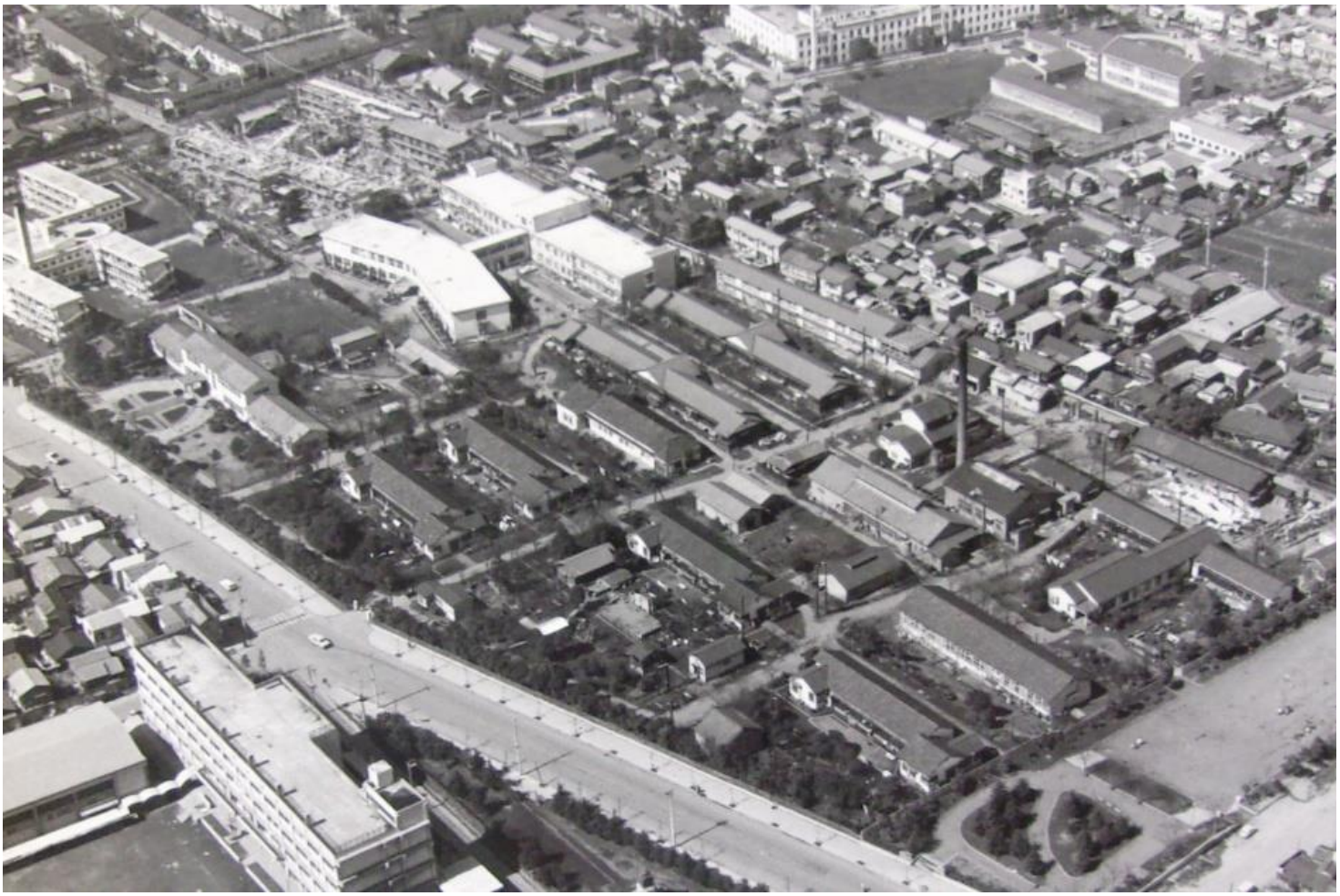


病室

板橋分院　大正3年(養育院六十年史より)

東村山分院　昭和34年
（東京都健康長寿医療センター所蔵）

旧恵風寮　昭和36年（東京都健康長寿医療センター所蔵）



利用者ではなく在院者・被保護者と呼ばれていた頃
板橋構内　昭和39年
（東京都健康長寿医療センター所蔵）

養育院を支えた
皇后陛下の御下賜金

櫻園通信　83　令和5年2月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

宮本孝一
老年学情報センター

一八八九（明治二二）年の一一月、昭憲皇太后（明治天皇の皇后）の命で香川敬三皇后宮大夫（皇后宮の長官）が養育院の視察に訪れました。養育院の職員は院内を「隈なく」（渋沢栄一述「回顧五十年」）案内しました。

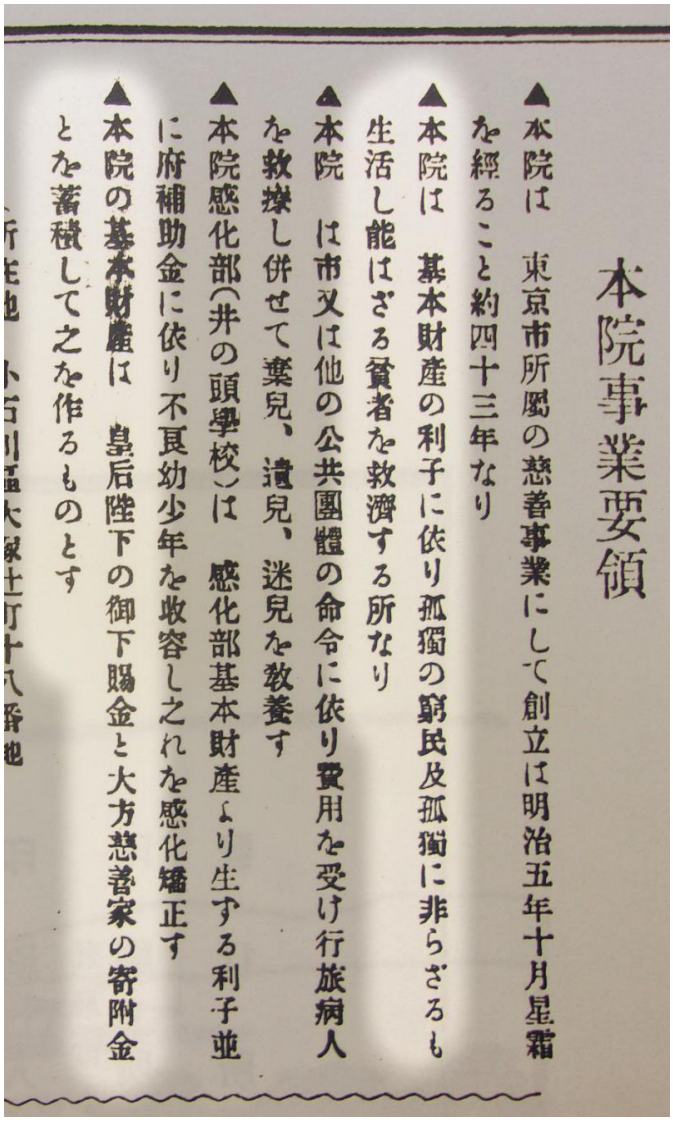
その年、養育院は渋沢栄一による私営から東京市営に移行しましたが、市からの運営費支給は無く、渋沢と慈善会による資金集めで運営を続けていました。

東京府内の貧窮者は増える一方で、本所長岡町の養育院では、定員一五〇人の老朽化した建物に六〇〇人以上も収容し、厳しい生活環境になっていました。

皇后宮大夫の視察から八日後、「皇后陛下思召を以て、其府養育院へ一ヶ年六百円下賜せらる」と下賜金の思命が下り、ただちに東京府と養育院に伝えられました。

これが養育院への下賜金のはじまりとなりました。養育院への毎年の下賜金は貞明皇后（大正天皇の皇后）にも引き継がれ、市営時代いっぱい続けられました。

下賜金と慈善家からの寄付金を基本財産とし、
その利子を養育院の運営資金とした



本院事業要領

▲本院は　東京市所屬の慈善事業にして創立は明治五年十月星霜を經ること約四十三年なり

▲本院は　基本財産の利子に依り孤獨の窮民及孤獨に非らざるも生活し能はざる貧者を救濟する所なり

▲本院　は市又は他の公共團體の命令に依り費用を受け行旅病人を救療し併せて棄兒、遺兒、迷兒を教養す

▲本院感化部（井の頭學校）は　感化部基本財産より生ずる利子並に府補助金に依り不良幼少年を收容し之れを感化矯正す

▲本院の基本財産は　皇后陛下の御下賜金と大方慈善家の寄附金とを蓄積して之を作るものとす

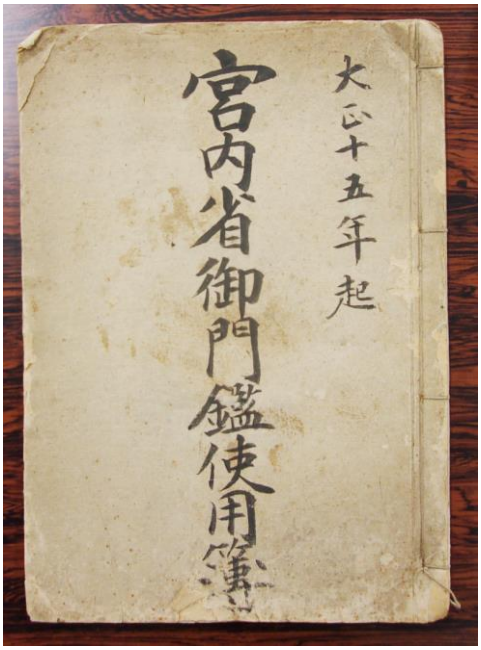
所在地　小石川區大塚上町十八番地

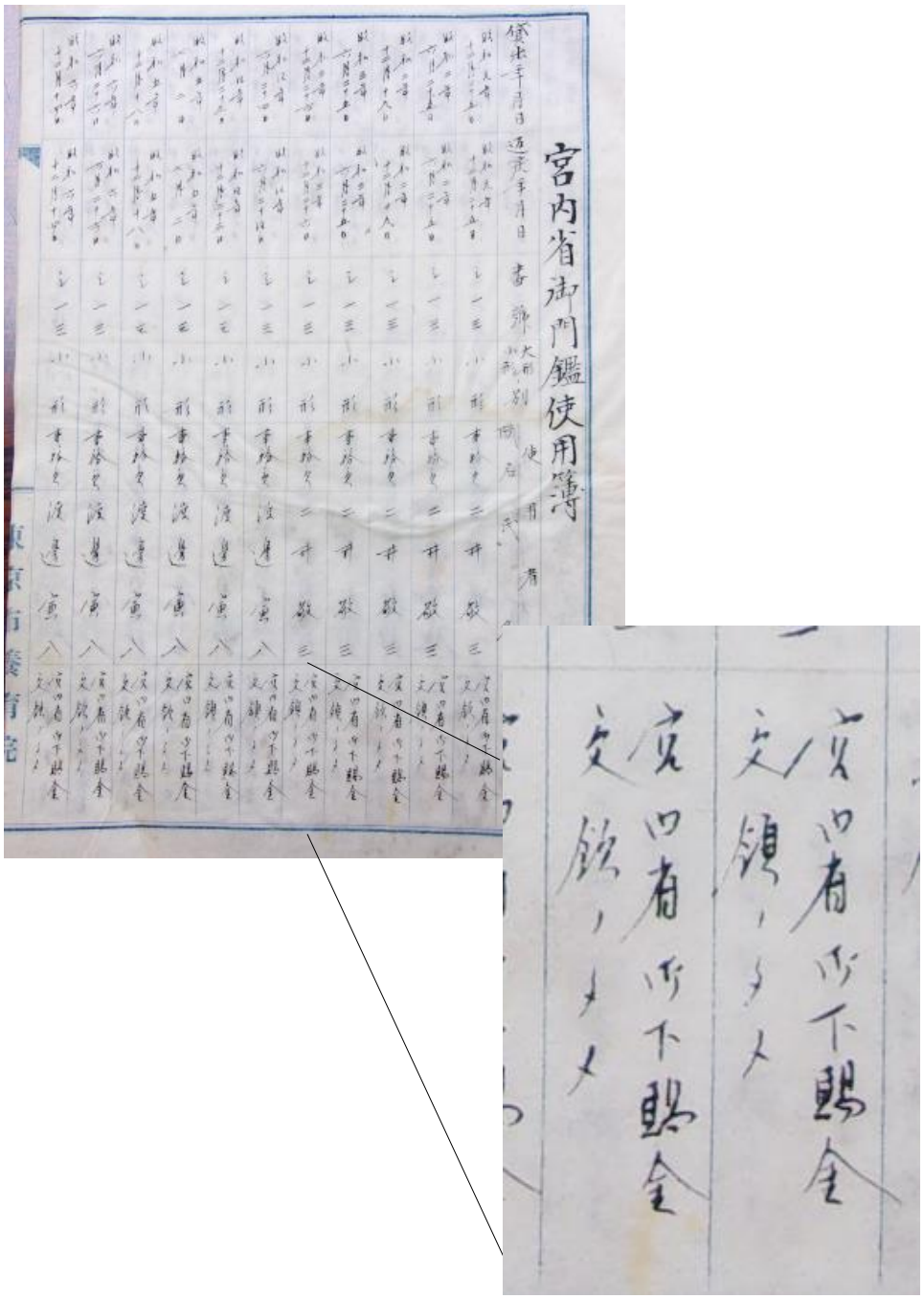
東京市養育院月報（九恵）157号1914（大正3）年　巻末
東京市養育院月報復刻版　不二出版より

下賜金開始後、皇室と養育院の関わりが始まります。

一九四三(昭和一八)年刊行『養育院七十年史』には、一八八九(明治二二)年から一九三〇(昭和五)年までの四一年間に、約三〇の皇室関連の出来事(毎年の下賜金や、皇族や宮内省の視察、視察後の寄付、土地の下賜など)があったことが記載されています。

一九三一(昭和六)年以降は、一九四三(昭和一八)年まで毎年の下賜金拝受の記載があるのみで、その他の皇室関連の出来事は一件のみと激減しました。





宮内省に下賜金を受け取りに行った記録
(東京都健康長寿医療センター所蔵)

養育院の児童教育 その1

櫻園通信　84　令和5年2月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

宮本孝一
老年学情報センター

養育院の始まり　明治五年一〇月一五日、ロシア皇子来日に先立ち東京市中の浮浪者が本郷の旧加賀藩邸の長屋に収容されました。これが養育院の始まりとされています。このとき集められた収容者は約二四〇人、そのうち子どもが九七人いました。

収容者は翌年二月に貧民保護の常設施設として上野に養育院が開設し、その中には子どもの教育を行う一三坪の筆算所が設けられました。当時制定され伍長規則を見ると、筆算所では文字の読み書き教育が行われていたようです。はじめは子どもも大人も混在で収容されていましたが、明治一一年に筆算所は子ども専用の寝室に改修されました。子どもの教育は続けられ、一〇歳以上の子どもは午後は工業（実業教育）を受けました。

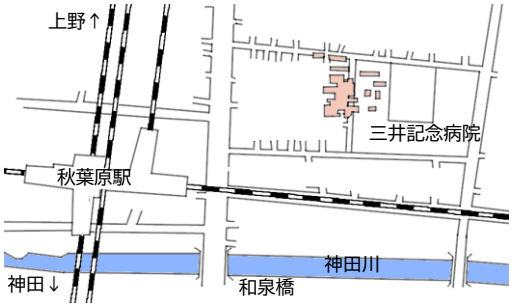
明治一二年に養育院は神田和泉町に移転。このころから子どもの不良化が顕著になってきました。また気力が無い不活発な子どもも多く見られ、渋沢栄一院長は親代わりの愛情をもって子どもに接する必要を説いていました。

本所長岡町時代　明治一八年、税からの運営費支弁が打ち切られ渋沢栄一が運営費を担うことになった養育院は本所長岡町に移転。そこには幼童室・教場・幼童者手洗所が設けられました。このころ子どもの処遇改善のために瓜生岩子が招聘され幼童世話掛に就きました。

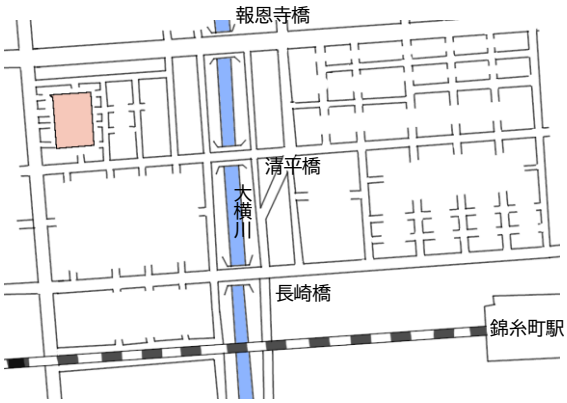
子どもの教育は尋常小学校に準じた内容とし、読書・作文・習字を主とした簡易教科書が使われました。

大塚時代　明治二九年に養育院は大塚に移転。大塚時代には感化部開始、安房勝山町に臨海保養所開設（明治三三）年、井之頭学校開校（明治三八）年、安房分院・巣鴨分院開設（明治四二）年と、子どものための諸施設が次々作られました。

大塚移転時は、本所の教場が移築され、簡易な課程の小学校としました。小学校では修身・読書・作文・習字・算術の授業が行われ、修身科が特に重視されました。教師は、書記一人・雇人二人の三人でした。



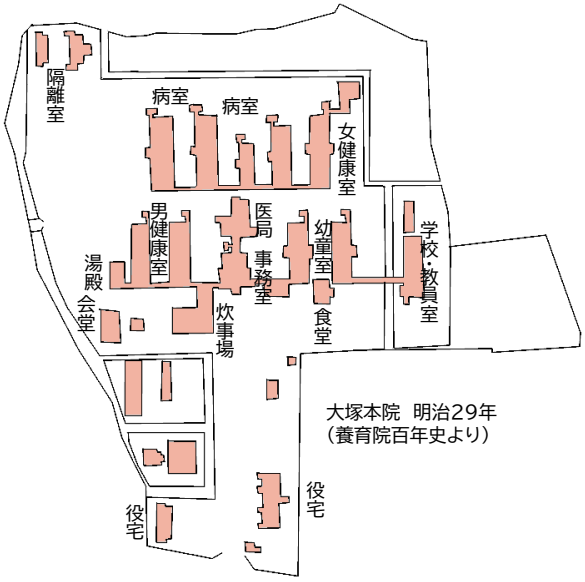
養育院の位置（実測東京全図　明治11より作図）



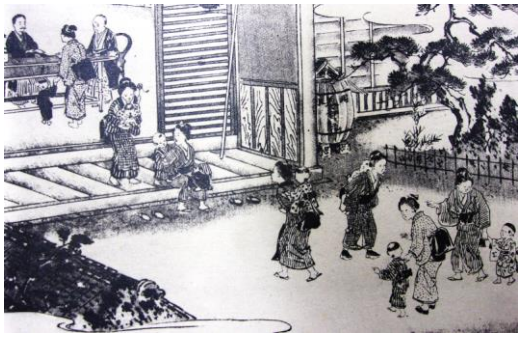
養育院の位置（塩見鮮一郎「貧民の帝都」より作図）

明治三二年頃から収容児童が増加したため、明治三五年に新校舎が建てられました。それまで使っていた教場は、指物や組紐などの指導そする手工教場となりました。女子はさらに裁縫・編物・造花を行い、手工の技能育成を図り、製作品の売り上げは女子の賃金と出院後のための貯金としました。

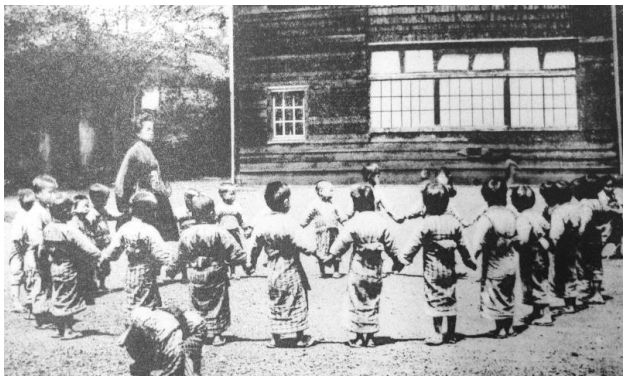
不良化する子ども　日清戦争以降、東京市中では棄児や孤児の不良化が顕著になってきました。養育院の中では収容した子どもが不良少年の影響を受けるようになり、普通児童と不良児童を分ける必要が出てきました。まずは敷地内に幼童室とは別に感化部を設けて不良児童を隔離しました。しかし環境改善の効果はなく、不良児童の専門施設を本院から離れた土地に設けることとし明治三八年に井之頭学校が開校しました。



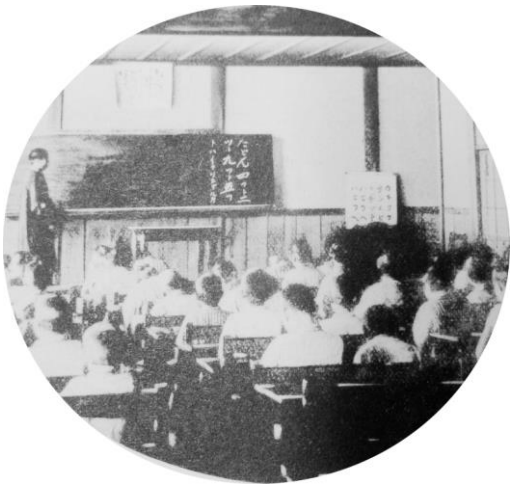
大塚本院　明治29年
（養育院百年史より）



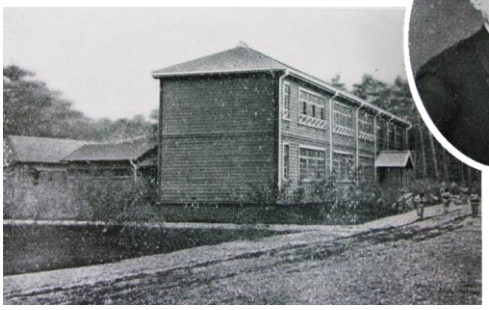
里親へ里扶持を渡す　明治30年ごろ
（創立六十周年記念写真帖　東京市養育院　より）



幼稚園児　明治40年
（創立六十周年記念写真帖　東京市養育院　より）



教場　明治39年
（創立六十周年記念写真帖
東京市養育院　より）



創立当時の井之頭学校（養育院六十年史より）

感化部顧問
三好退蔵

養育院の児童教育 その2

櫻園通信　85　令和5年2月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

宮本孝一
老年学情報センター

病弱な子ども　養育院に保護された子どもは体が弱い子が多く、肺結核での死亡率も高い状態でした。そこで、渋沢院長は対策を養育院医長の入沢達吉に相談。欧米の貧民療養所に倣って海浜保養所を設けることとなりました。まず明治三三年に安房勝山町で試験運用が始まり、効果認められて恒久的な保養所として明治四〇年に安房分院が開院しました。

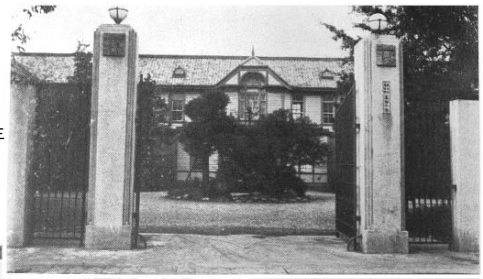
安房分院では小学校に準じた教育を行っていましたが小学校令に基づく学校ではなく、公式には未就学児童という扱いで小学校の卒業資格が得られませんでした。昭和一一年に船形町長から認可を受けてやっと安房分院内での教育も公式小学校と認められました。ただ院内教育では社会性の育成に難があったため船形小学校への登校を求めましたが館山市の許可が得られませんでした。昭和一六年に国民学校令が施行されると、安房分院内の教室が船形国民学校仮教室という扱いになり、安房分院は安房臨海学園に改称されました。

普通児童の専用施設　井之頭学校や安房分院ができたあとも多くの普通児童が大人とともに本院敷地内で生活していたため大人からの悪影響が続いていました。

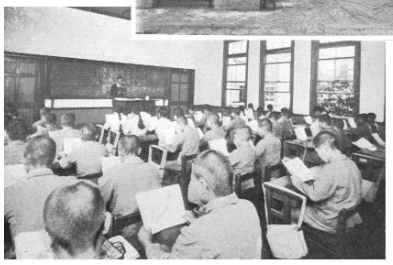
そこで普通児童専用の施設を計画し、明治四二年に巣鴨分院が開院しました。巣鴨分院は附属小学校・講堂・寄宿舎で構成されました。巣鴨分院では学校教育より雇預け（職工の徒弟や商店の使いとして児童を預かり働かせること）を優先していましたが成人になっても読み書きができない場合があることがわかり、雇預けは義務教育終了後としました。

板橋本院時代　巣鴨分院の附属小学校では年長児童が増え、二〇歳近くの生徒も出てきました。そこで一八歳以上は巣鴨分院に収容しないこととしました。子どもの服装は紺絣から洋服に改められ、生徒自治会も作られました。

安房分院　大正10年（養育院六十年史より）



正門　昭和4年



教室　昭和7年

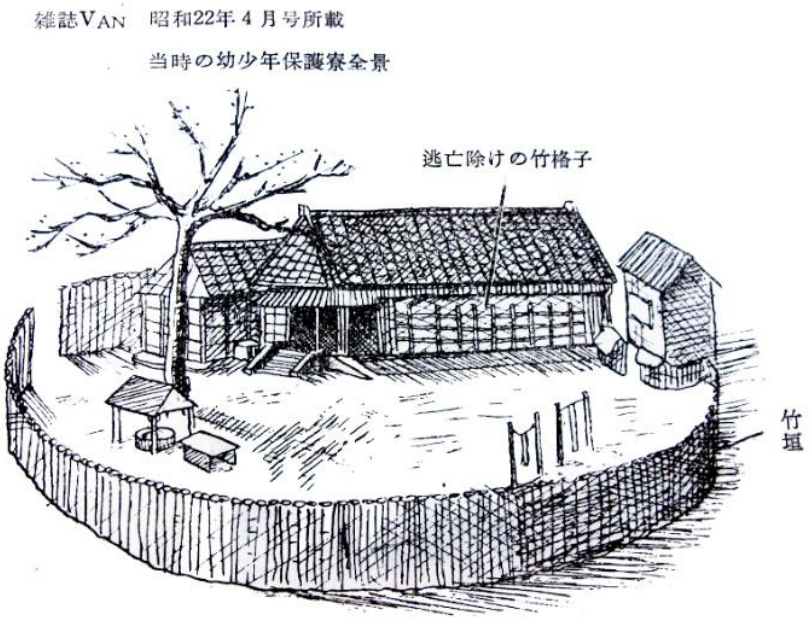
巣鴨分院（養育院六十年史より）

巣鴨分院附属小学校の教育制度は年々整備されてきましたが、小学校令に基づく正式な学校ではなく、卒業しても小学校卒業資格が得られませんでした。そこで昭和一一年より、一部の児童を外部の尋常小学校に通学する院外教育としました。昭和一六年に国民学校令が施行されると巣鴨分院の全児童が院外の小学校に通うことになりました。

巣鴨分院はのちに老朽化等の事情から移転し、昭和一八年に石神井学園として開院しました。

児童の疎開　太平洋戦争が激化すると年長児童の学徒動員（工場作業）が相次ぎ、空襲も頻繁になりました。

そこで昭和二〇年二月に安房臨海学園の児童と本院の乳幼児が塩原町に疎開しました。昭和二〇年四月一二日の空襲では石神井学園が被災し急きょ塩原町への疎開が決まりました。翌四月一三日、石神井学園の生徒の大部分はまず板橋の本院に移されましたが、その晩に本院は大空襲で全焼。生徒は再び学園に避難し、学園に移されましたが、その晩に本院は大空襲で全焼。生徒は再び学園に避難し、学園で疎開の準備を整えて、四月一九日から段階的に疎開先へ移動しました。疎開先では食料事情が悪化し、多くの児童が命を落としました。



幼少年保護寮（養育院八十年史より）

幼少年保護寮（東京都健康長寿医療センター所蔵）

終戦　戦争が終わると安房臨海学園の生徒は館山へ、本院の乳幼児と石神井学園の生徒も東京に戻りました。終戦直後は養育院にたくさんの戦災浮浪児が集められ、他の保護児童への悪影響が顕著になりました。そこで本院に幼少年保護寮を設けて浮浪児を収容することにしました。翌昭和二一年には千葉県に八街学園を開設してそこにも東京の浮浪児を収容しました。

同年秋に東京都の民生局に児童課が設置されると養育院の児童施設の扱いが議論になりました。そして昭和二三年の児童福祉法施行を機に養育院の児童施設（石神井学園・安房臨海学園・八街学園）は民生局に移管されました。

櫻園通信　86　令和5年2月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

宮本孝一
老年学情報センター

渋沢邸で グラント将軍をもてなす

グラント将軍

グラント将軍の来日　明治十二年、グラント将軍が来日しました。グラント将軍とは元アメリカ大統領で南北戦争の北軍の将軍です。大統領を退任した後、世界周遊旅行に出かけました。日本への滞在もその旅行です。

七月に東京に到着することになり、日本側は接待委員を結成してグラント将軍をもてなすことになりました。

接待委員の代表は渋沢栄一でした。渋沢栄一三九歳の頃です。この年の八月に養育院事務長という役職名は院長に改称、事務長だった渋沢栄一はこのときから養育院の院長となります。また一〇月には上野の養育院本院が神田に移転しました。上野の場所が博物館用地に決まったためです。

接待委員は、グラント将軍をどのようにもてなしたらよいかわかりませんでした。「日本流の御饗応がお気に入りはすまいし、さらばと云って西洋式の事は我々は何も知らないから余程困りました」と渋沢は語っています。（渋沢栄一伝記資料第三八巻　四五九ページ）

ともかく渋沢は「日本の国情が西洋諸国に劣らないと云うことを示そう」と考えました。（渋沢栄一伝記資料第二五巻　五二六ページ）

八月に「個人の家に招待しなければ西洋式の接待ではない」という話が出て、八月五日に渋沢の飛鳥山邸で午餐会を催すことになりました。

渋沢邸でのユニークな催し　グラント将軍を渋沢邸に招くにあたりユニークなアイデアが出ました。武道の演武です。

渋沢が神道無念流の剣術を身につけており、北辰一刀流の玄武館にも出入りし、様々な武術家と交流を持っていたため」と推測されます。

（中嶋哲也　術から文化へ：元米国大統領グラントの演武鑑賞と柔術　鹿児島大学教育学部研究紀要　人文・社会科学編　第六六巻　二〇一五）

渋沢邸での午餐会では庭の飛び石を撤去して平らな地面の試合場がつくられ、その左右に幕を張って武道家たちの控室としました。

武道演武について当時の新聞では次のように書いています。

柔術に名高き磯又右工門氏が其門弟を連れ来たり、始めに柔術の模範を取り次に乱取を為す。畢て榊原健吉氏の門弟数人鎖鎌・長刀・太刀の試合等数番を一覧に入れしに、グラント君も其技の精妙なるを感賞せられ深く渋沢君の款接の懇到なるを謝せられ、午後二時すぎに帰館（東京日日新聞）

強い植木職人　武道演武の様子を渋沢栄一の娘歌子が書き残しています。

予定していた演武が一通り終わると、グラント将軍は柔術に興味を示して「柔術は力と技術といづれを重しとするものであるか」と尋ねました。

柔術家と武術を知らない力自慢で試合をさせてみようという話になり、渋沢栄一は邸宅に出入りしている植木職人の三五郎という体の大きい人物を呼びました。対する相手は磯又右エ門が連れてきた弟子でした。名前はわかりません。

植木職人と柔術家はもみ合うばかりで勝負がつきません。グラント将軍は気の毒だから引き分けにできないか、と言いました。最後に柔術家は植木職員にチカラでねじふせられて「参った」と言いました。力が武術よりうわまわるという結果です。

すると磯は別の弟子でもうひと試合をと申し出ました。次の試合では、別の弟子が相手の力をうまく利用して植木職人の体を崩して地面に倒しました。

力より技術という結果が出ると、グラント将軍はたいへん喜びました。

誰が植木職人と戦ったか　植木職人と戦わなかった師匠磯又右エ門(磯正智)は天神真楊流という柔術の流派を開いた人物です。渋沢邸では、磯と弟子の福田が柔術の型を、五代と嘉納という門弟が乱取りを披露しました。

このとき乱取りをした一人が、のちに講道館柔道(現代の柔道)を創始し、現代でも「柔道の父」「日本体育の父」よ呼ばれる**嘉納治五郎**(当時二〇歳)です。

治五郎は福田の道場で天神真楊流柔術を学んでいました。またその二年前に東京大学文学部に入学し、渋沢栄一の経済学の講義を聴いていました。嘉納治五郎が明治一四年に大学を卒業したとき、同年の卒業生に森鴎外(医学部)がいました。

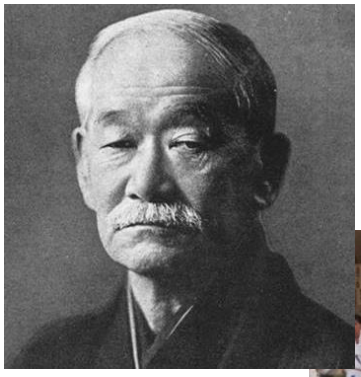
柔術の師である磯や福田が亡くなると治五郎は起倒流柔術を学び、明治一四年に独自の柔道を確立。翌年講道館という道場を開きます。

これが国内外に広まり、オリンピックの正式種目にもなっている「柔道」です。

嘉納治五郎明治四二年には国際オリンピック委員会の委員に就任。東京オリンピック(昭和一五年)の招致に成功しました。残念ながら日中戦争の激化などの事情で東京大会は実現できませんでしたが。

渋沢邸出入りの植木職人と試合をしたのは五代と嘉納かそれとも福田か、記録は残っていません。

植木職人に勝った方か負けた方か、どちらが嘉納治五郎だったのでしょうか？



嘉納治五郎

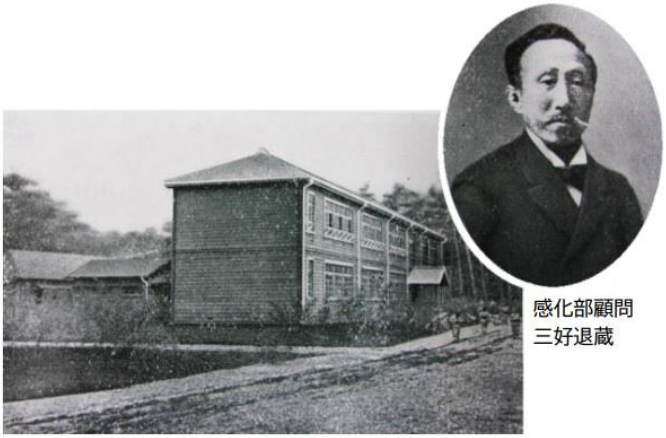
養育院感化部 井之頭学校とブラスバンド

櫻園通信 87　令和 5 年 3 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

作：栄畑南美（えばた　なみ）
老年学情報センター

東京都健康長寿医療センターの前身である養育院は、1872 年（明治 5 年）に病人、孤児、障害者、困窮者などの保護施設として設立され、渋沢栄一が養育院院長を長く務めました。養育院には子どものための施設もありました。その中の 1 つが、非行少年の更生をはかる「養育院感化部　井之頭学校」です。現在の井の頭恩賜公園のお隣り、井の頭自然文化園のある場所に設置されていました。

今回は、井之頭学校についてご紹介します。



感化部顧問
三好退蔵

創立当時の井之頭学校（養育院六十年史より）

ミシン裁縫科の作業　昭和 7 年
（創立六十周年記念写真帖より）

1894 年の日清戦争の前後より東京市内に浮浪少年が増加し、養育院でも受け入れを開始しました。1900（明治 33）年、養育院に非行少年のための専門施設として感化部が開設されました。しかし、同一敷地内に入所していた普通孤児への悪影響があったため、養育院本院と感化部の敷地を別にする必要が生じました。1905（明治 38）年宮内省御料地だった武蔵野村井之頭を借り受け、感化部は「養育院感化部　井之頭学校」として移転します。この時の児童数は 26 名でしたが、1910（明治 43）年の時点で「創立以来感化部に収容せし人員は 397 名」との記述が東京市養育院写真帖（明治 43 年発行）にあります。

井之頭学校では学科の勉強の他に、少年たちの将来の自活のため、ミシン裁縫、農業、園芸、木工などの授業も行われていました。

農業科の作業　昭和 7 年
（創立六十周年記念写真帖より）

また、井之頭学校では、少年たちの心の教育のため、狂言やブラスバンドなどの活動も行われていました。ブラスバンドに関する記述を、創立六十周年記念写真帖から旧字を修正し句読点を補って裏面に引用します。

井之頭バンド　ともすれば荒み果てようとする生徒の情操を滋養するため、昭和２年２月子爵渋沢敬三氏の好意により設けられたるものにして、全陸軍軍楽隊長春日嘉藤次氏指導の下に朝夕研鑽して止まず、井之頭公園に武蔵野の野趣を求めて杖を曳いた都人士が、思いかけず森の彼方より亮々たる楽の音を耳にするのはこのバンドの演奏である。（創立六十周年記念写真帖、p.35）

渋沢敬三は渋沢栄一の孫であり、日本銀行総裁、大蔵大臣を務めた人物です。

井之頭学校バンドが1930（昭和5）年の感化部開設満 30 年・井之頭学校となって満 25 年の記念運動会で演奏を披露した時の記録があります。養育院月報より旧字を修正し句読点を補って引用します。

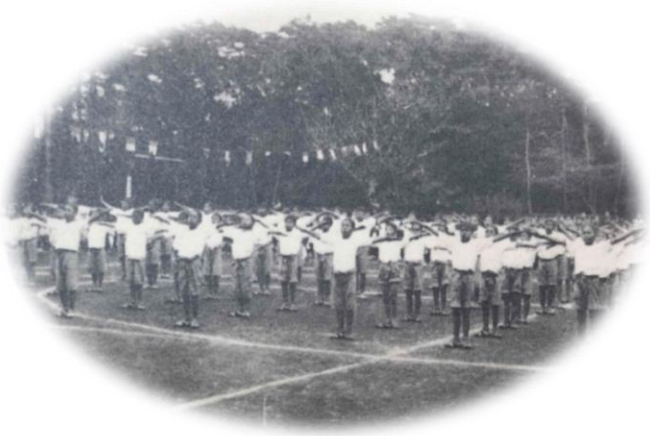
井之頭学校の誇りバンド演奏に移ったのが十二時十五分、照り輝やける白日の下、幾千の観衆に囲まれた野外のステージに、日頃訓練の技量を発揮せんとする彼等バンドの面々の得意さや何と形容しよう。（中略）演じ続けられる奏楽は、高く上っては遮ぎるものもない秋空一面を、森にこだましてはこの学園を、忽ちにしてこの世ならぬ雅楽浄土と化せしめ、満場の人々をして悉く陶酔せしめた。小学生たちがそのメロディーに調子を合せて旗を振っているのも気持ちよく眺められた。（養育院月報 352 号、p.20）

このように、井之頭学校バンドの演奏の腕前はかなりのものだったようですね。運動会は年に一度の学校開放日でもあり、近隣住民や近隣小学校の児童たちも大勢やってきたようです。

井之頭学校バンド　昭和７年
（創立六十周年記念写真帖より）

運動会では「各小学校生徒を招待して、単に観覧を乞うのみでなく更に競技に参加せしめて、各校間の対校レースを遂行せしむることによって、その生徒等からは勿論その父兄達からも非常な人気を得て来た」（養育院月報 352 号、p.18）と、地域に親しまれたイベントであった様子が書かれていました。

1930 年 10 月 17 日に行われた記念運動会には、渋沢栄一と渋沢敬三も来賓として見学に来て、栄一は開会式で挨拶をしたことも記載されています。非行少年たちの教育施設だった井之頭学校ですが、今回読み解いた資料からは、栄一や敬三だけではなく、近隣住民からも見守られていた様子が伝わってくるのではないでしょうか。



運動会　昭和６年（創立六十周年記念写真帖より）

【参考文献】
東京都健康長寿医療センター編（2023）『東京都健康長寿医療センター病院、研究所開設 50 年・養育院創立 150 年記念誌』東京都健康長寿医療センター。
東京市養育院編著（1932）『創立 60 周年記念写真帖』東京市養育院。
東京市養育院編（1930）『東京市養育院月報』第 352 号。